

(続紙 1)

京都大学	博士 ( 教育学 )	氏名	森田 裕之
論文題目	ドゥルーズ＝ガタリのシステム論の教育学的再構築 —生成と流動の教育学のために—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、「教育とは何か」を体系的に問い直すために、ドゥルーズ＝ガタリの物質から始まり生命そして人間にいたる自然 - 社会理論をシステム論として再構成し、このシステム論を土台に教育が〈発達としての教育〉〈生成としての教育〉〈再生としての教育〉の位相の異なる3つの変容からなることを明らかにし、それぞれの変容理論をドゥルーズ＝ガタリに沿いつつヘーゲル・ニーチェ・バタイユの哲学によって深化させることによって、「生成と流動の教育学」として再構築しようとした論文である。</p> <p>序章において、芸術家ゴッホの生の変容が取りあげられ、この変容が従来の教育学では問うことのできない、しかしそれでいて重要な変容であることが示される。そして、この事例を手掛かりにしつつ、本論文がなぜ「教育とは何か」という極めて原理的な問いから始められなければならないかの理由が明らかにされる。</p> <p>「第Ⅰ部 ドゥルーズ＝ガタリと自然 - 社会理論の構築」では、ドゥルーズ＝ガタリの自然 - 社会理論はシステム論へと再構成され、教育を問うための基本原理が構築される。まず第1章では、ドゥルーズ＝ガタリのテクストを手掛かりに、物質から生命にいたる自然理論がシステム論へと再構成される。そのとき自然は表層 - 深層の中での諸微粒子の自己運動として捉えられる。第2章と3章では、システム論として再構成された自然理論を手掛かりに、ドゥルーズ＝ガタリの社会理論が記号論の位相で再構成される。そして、社会は、「単一の超越項をもった社会」（超越的な専制君主によって支配された帝国社会）、「多数の超越項をもった社会」（専制君主という絶対的な権力をもたず多数の首長によって支配された未開社会）、「内在項をもった社会」（専制君主から自由になった自治都市）、「超越項も内在項ももたない社会」（帝国にも自治都市にも属さない遊牧民）の4つの異なる諸記号の運動態として捉えられる。</p> <p>「第Ⅱ部 生成と流動の教育学の構築と〈教育〉の再定義」では、第Ⅰ部でのシステム論化された自然 - 社会理論をもとに、「生成と流動の教育学」として教育学が再構成される。まず第4章では、再構成された自然 - 社会理論の成果をもとにして、帝国社会と自治都市としてそれぞれ具象化される諸記号の運動が資本主義を生みだしていく機構が示され、そこから不可避免的に一義的な諸記号としての〈人間〉が誕生するとともに、同時に、その記号的位相を超出し流動する超記号＝微粒子的位相というべき〈狂気＝芸術〉と、同じく未だ記号的位相に属さない原記号的位相の流動性をもった未分化な連続体というべき〈子ども〉とが、生まれることが明らかにされる。このような〈子ども〉が生みだされることによって、〈子ども〉を〈人間〉に発達させる〈発達としての教育〉が生まれる。しかし〈人間〉は一義的な記号世界に閉じこめられてはならず、その記号的位相を超克する〈狂気＝芸術〉への変容が生起する。第5</p>			

(続紙 2)

章では、〈発達としての教育〉を超克するものとして、この〈狂気＝芸術〉への変容、すなわち〈生成としての教育〉が明らかにされる。このような変容はゴッホやニーチェの事例でも明らかなように、一方通行であり〈狂気＝芸術〉から再び〈人間〉には戻らない変容とみなされる。そのため、この変容は資本主義の存続を危うくするものでもあり、第6章では、この〈生成としての教育〉に取って代わるものとして、遊びに代表されるように、〈人間〉が原記号的位相へと移行し再び記号的位相へと立ち戻る変容としての〈再生としての教育〉が生まれることが明らかにされる。〈再生としての教育〉は〈生成としての教育〉とは異なり、一方通行ではなく可逆的な変容を意味する。第7章では、これまでの議論を整理しながら、〈発達としての教育〉と〈生成としての教育〉、そして〈再生としての教育〉の関係が捉え直され、この3者が異なる位相に関わりながらも互いに関係し合っており、ボロメオの結び輪を形成していることが明らかにされる。このようにして「生成と流動の教育学」として教育が再定義される。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

ドゥルーズ＝ガタリは、ポストモダンの思想家として、人文科学において大きな影響を与えながらも、教育哲学の分野では部分的な摂取にとどまり、それが教育学的思考にどのような世界を開くのか本格的に取り組んだ研究は皆無といってよい。本論文は、ドゥルーズ＝ガタリの物質から始まり生命そして人間にいたる壮大なスケールの自然－社会理論をシステム論として再構成し、そこから教育を自然－社会という異なる位相を横断して生起する、無数の微粒子による生命的流動と記号的秩序形成のダイナミズムとして捉え直し、教育学的思考を「生成と流動の教育学」へと再構築しようとした意欲的な論文である。

本論文の優れた点は、まず第1にドゥルーズ＝ガタリの多様体ともいべき諸テクストを読み解き、ドゥルーズ＝ガタリの自然－社会理論を構成しているカテゴリーを探り当て、そのカテゴリーを組み直してシステム論へと再構成したことである。ドゥルーズ＝ガタリの自然は諸微粒子の形態変化（生成）として捉えられているのにたいして、社会の方は諸記号の形態変化として捉えられている。両者は位相的に異なりながら接続している。この両者を自然－社会理論として統一的に論じることで、ダイナミックな形態形成と形態変化を捉えうるシステム論として再構成している。このようにドゥルーズ＝ガタリの自然－社会理論をシステム論として再構成することで、記号的位相を超える変容のダイナミズムを捉える教育学の基盤を構築することに成功している。

第2の点は、この再構成されたドゥルーズ＝ガタリの自然－社会理論を敷衍して、資本主義において〈人間〉と〈狂気＝芸術〉そして〈子ども〉の出現とが同時的であることと、その理由を明らかにしたことである。このとき〈狂気＝芸術〉とは記号的位相を超出した流動する超記号＝微粒子的位相の在り方を指し、また〈子ども〉とは未だ記号的位相に属さない原記号的位相の流動性をもった未分化な連続体を指しており、どちらも資本主義のエージェント、一義的な諸記号としての〈人間〉との関係の中で位置づけられる。このようにしてフーコーやアリエスらの近代批判の研究成果を、資本主義のシステム論的理解の中に巧みに織り込むことで、教育を再定義するための前提を構築した。

第3の点は、ここから〈子ども〉から〈人間〉への変容としての〈発達としての教育〉と、〈人間〉から〈狂気＝芸術〉への変容としての〈生成としての教育〉、さらに〈人間〉が原記号的位相へと移行し再び記号的位相へと立ち帰る変容としての〈再生としての教育〉という3つの異なる次元の教育を導きだし、相互の関係を明らかにしたことである。微粒子の位相における形態変化を捉える自然概念から、記号的位相の形態変化を捉える社会理論までを重層的統合的に捉えることで、〈発達としての教育〉のみならず〈生成としての教育〉ならびに〈再生としての教育〉の在りようを明らかにし、従来の教育学研究においては見えなかった教育の次元を捉えることができたといえる。

試問においては、本論文におけるドゥルーズ＝ガタリの思想読解は、ドゥルーズ

(続紙 4)

＝ガタリのテキストがはらんでいた従来の哲学思想の語り方への批判的表現を形式的な論理に縮約し、理解可能なシステム論へと回収してしまうことで、思想本来の力を弱めてしまったのではないか、あるいはまた、極めて体系的・形式的に論じた結果、論述は終始抽象的なレベルでなされ、従来の教育研究とのつながりや、教育現実との関わりを考えるための手続きが十分ではないのではないかといった、いくつかの問題点が指摘された。

しかし、このような問題点は著者自身が課題としてすでに自覚していることでもあり、本論文の評価をいささかも落とすものではない。本論文はドゥルーズ＝ガタリの思想を総体として捉え直し、教育学として再構築し、新たな教育世界を切り開いた研究として高く評価することができる。よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成23年12月8日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：                    年            月            日以降